

巻頭言

研究を支える知的背景とは何か

—時代と人間の真実から目をそらさない研究者であるために—

コミュニティ福祉学研究科委員長 浅井春夫

コミュニティ福祉学研究科紀要は、本研究科院生の研究発信の場として創刊され、本号で第14号を迎える。本号の投稿数は、論文が8本、研究ノートが2本となっている。

2002年の創刊以来、今号を含めると、論文が81本、研究ノートが44本、翻訳が12本、その他、文献紹介が1本となっている。本研究科院生のみなさんが研究に真摯に向かっている大いなる到達点である。

今回、はじめて自らの論稿が活字になった院生もおられることでしょう。これからの研究生生活のなかで数多くの論文を執筆し、著書を世に問うこともそう遠くないうちに行われることを心から期待するものである。

研究する者は、研究内容を文字化することに挑戦する真摯な努力が問われている。それは自らの研究を社会に発表する職業的責任でもある。書くという営みには、地道な努力と同時に勇気がある。批判や攻撃の対象とされることも書く者の覚悟として問われるのである。ときとして誤謬（形式的誤謬・論理的誤謬）や正確さを欠いた主張・提案・論理展開をすることもあられるかもしれない。そうした過ちを犯す可能性を孕みながら、それでも書くという勇気の源泉は何であろうか。

その点について率直に言えば、権利を踏みにじられている国民、誠実に働く人々、マイノリティに属するとみられる住民など、“弱き立場で生きる人たち”へ、どのような視線と悲しみへの共感能力を抱いているのかが問われている。それは対人的なレベル、施設・機関・地域などのレベル、社会と歴史のレベルのそれぞれで貫かれていることが求められる。

必要だと思うこと、言わなければならないことを口にし、文字にし、行動に移したときにさまざまなレッテルを張られることがある。それもまた社会や組織の現実である。それをも受け止めながら、言うべきことを言い続ける勇気とまっとうな怒りが研究には必要なのだ。

ベストセラーになった池井戸潤『下町ロケット2 ガウディ計画』（小学館）には、こういう登場人物の声がある。「このガウディ（医療器具—浅井）は、大勢の子どもたちが、完成し、臨床で使われる日を待っているのです。どんな会社であろうと、人の命を守るために、ひたむきに誠実に、そして強い意志を持って作ったものであれば、会社の規模などという尺度ではなく、その製品が本当に優れているかどうかという、少なくとも本質的な議論で諮られるべきです」という。どんなしごとであれ、その本質は社会貢献である。それを放棄した企業は必ず衰退する。自らの立脚点を定め、真実を見つめ、知的な熱のある人間でありたいものである。

研究活動においてはなおさらである。自らの研究が人と社会にいかに関与できるか。それは国民の一人ひとりの「個人の尊厳」を守り大切に作る知的営みである。

いま何を自らの問題意識とし、いかなる研究テーマを設定するのかが、研究する者にとって覚悟が問われることになる。この時代の研究者の使命を問い続けていきたいものである。本物の研究者をめざして、2016年もそれぞれの歩みを前にすすめていこう。